

は心正しく導引の業を過ぎはひととして、主家のやうを伺ふに、主人の病あつしと聞くより、とみに逆井の里に赴き、玄ひて看病のつとめをねがふに、不興をゆるされ、介抱すれども、その日をおくる過ぎはひだになければ、晝は野菜を商ひて、飲食の資となし、夜は導引をことゝして、主人が薬の料に替へ、夏は枕床を涼しめて、炎熱を去りぞけ、冬は肌にあるじをあたゝめ、身は藜麥の麁糧を嘗めて、より／＼鯉魚の羹などすゝめ、誠忠至らずといふことなければ、諸崎おひ／＼快方におよび、起居もつねに違はねば、ある時中吉主人にむかひ、黄金五兩を取りいで、吾もひとつの思ひれ侍れば、玄ばしのいとま給はるべし、これより浪華に赴きて、主人の家を再興すべし、大利は時を得てうべく、是を元としこのあたりに小商して待ち給へ、黄金はおのれ理を説きて主家の支配を勤めたる、二人をすかし借りつれば、とかくにいとま給ふべしとて、涙ながらに願ふにぞ、主人も感涙をとゞめかね、路資を分つに受けずして、旅行に財は妨なり、身を退きし頃に習ひおぼえし、導引の業こそ、まことに旅路の資なれとて、いと安々と浪華におもむき、おなじきわざにたよりを得て、堂島邊に徘徊するうち、算筆の道くらからざれば、富家のあるじにをしまれて、ことの上し詳に物がたりければ、主家を起すの忠節なればとて、力を合せて得させんといへるにより、諸崎を浪華へむかへ、主従もとより、かの中吉が忠功をあらはさんとて、口の内に中とゑるして、これを家の印とし、今も浪華にとみさかゆとぞ、

〔續日本紀元八〕養老五年正月甲戌、詔曰、至公無私、國士之常風、以忠事君、臣子之恒道、焉當須各勤所

職、退食自公、康哉之歌、不遠隆平之基、斯在災異消上、休徵叶下、宜文武庶僚、自今以去、若有風雨雷震

之異、各存極言忠正之志、

〔續日本紀聖武〕天平勝寶元年四月甲午朔、天皇幸東大寺、○中勅遣左大臣橘宿禰諸兄、白佛、○中大

伴佐伯宿禰波、常母云、久、天皇朝守仕奉事、願奈人等、爾阿禮波、汝多知祖止母云來久、海行波美内屍